京都府立大学学術報告（理学・生活科学）第46号　B系列 p. 29～35（1995年11月）

女子学生の恋愛意識と被服行動との関係
── Lee の恋愛類型論に基づく検討 ──

泉　　加代子

Relationship between Clothing Behavior and Love Style of Female Students
── Investigation based on Lee's Love Styles Theory ──

KAYOKO IZUMI

The purpose of this study was to investigate the relationship between the love styles of female students and their clothing behavior. The love styles were measured by the Lee's love type scale second version (LETS-2) developed by Matsui et al.. LETS-2 were consisted of 53 rating items to measure each of six love styles; "Mania", "Eros", "Agape", "Storge", "Pragma" and "Ludus". Clothing behavior were measured by the scale constructed by Nagano. The clothing behavior scales were consisted of 20 rating items composing of four subscales; "fashion-consciousness (CB1)", "tendency to think much of function and amenity (CB2)", "interest to appropriateness for social situations (CB3)" and "practicing economy (CB4)".

As a result of Chi square analyses, it was found that those who had high scores of "Mania" and "Eros" tended to show high CB1 score and low CB2 score, and high scores of "Pragma" and "Ludus" tended to show high CB2 score. These results suggested that the clothing behavior under the influence of their love styles.

(Received August 11, 1995)

1. 緒　　言

恋をすると外見も変わる，服装にも気を配るようになるとよく言われるが，恋人の有無，恋愛に対する意識や考え方が，その人の被服行動に何らかの影響を及ぼすのではないかと考えられる。恋愛は若者から老人まで年齢を問わず我々にとって最も関心があり，小説や歌においても絶えることのない永遠のテーマであるにもかかわらず，恋愛についての科学的分析は，最近，ようやく盛んになってきたところである[1]。

恋愛に関する意識や行動は，青年心理学や社会心理学の領域で研究が進められている。青年心理学における恋愛研究は，恋愛関係の発達段階や恋愛中の意識・感情を理論的に分析した研究が多く，社会心理学における恋愛研究は対人魅力に関する研究が中心となっている。その中で，対人魅力に含まれない恋愛研究独自

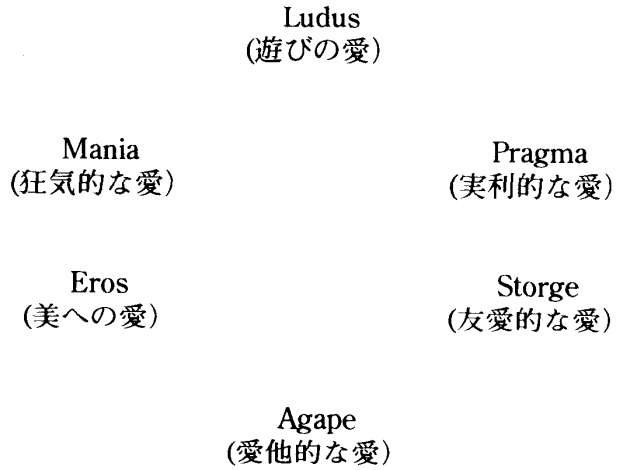

図1　Lee（1974）の恋愛関係の類型論（松井，1990）

京都府立大学女子短期大学部生活文化科
Kyoto Prefectural University

の理論の一つとして，カナダの心理学者 Lee の恋愛類型論がある。Lee は，小説や記録から4000以上の恋愛に関する記述を抽出して整理し，カナダとイギリスの青年を対象とした面接調査の結果に基づいて，恋愛関係を Mania, Eros, Agape, Storge, Pragma, Ludus の 6 つの類型に分け，現実の恋愛はいくつかの型の混合であると理論化している。そして，それらを色相環にたとえ，図 1 に示すような環状に位置づけて，向い側に位置している者同士は互いの恋愛観を理解できないとしている[2,3]。6 類型は，松井によって，Mania を狂気的な愛，Eros を美への愛，Agape を愛他的な愛，Storge を友愛的な愛，Pragma を実利的な愛，Ludus を遊びの愛と和訳され，それらの特徴は表 1 に示す通りである[4]。

表 1　Lee（1974，1977）の恋愛類型論における 6 類型の特徴（松井，1990）

名　称	特　徴
Mania（狂気的な愛）	独占欲が強い。嫉妬，憑執，悲哀などの激しい感情を伴う。
Eros（美への愛）	恋愛を至上のものと考えており，ロマンチックな考えや行動をとる。相手の外見を重視し，強烈な一目ぼれを起こす。
Agape（愛他的な愛）	相手の利益だけを考え，相手のために自分自身を犠牲にする事も，厭わない愛。
Storge（友愛的な愛）	穏やかな，友情的な恋愛。長い時間をかけて，知らず知らずのうちに，愛が育まれる。
Pragma（実利的な愛）	恋愛を地位の上昇などの手段と考えている。相手の選択においては，社会的な地位の釣合など，いろいろな規準を立てている。
Ludus（遊びの愛）	恋愛をゲームと捉え，楽しむことを大切に考える。相手に執着せず，相手との距離をとっておこうとする。複数の相手と恋愛できる。

この Lee の恋愛類型論の各類型を測定する尺度が，アメリカの Hendrick らによって作成され，その信頼性や妥当性が立証されている[5,6]。日本では，松井らが Hendrick らの尺度を参考にして，新たな項目を追加し，Lee の理論に含まれる 6 類型に対応する恋愛関係の意識を測定する独自の尺度を作成している[4]。松井はこの尺度を用いて，6 類型間の関係や恋愛行動の段階と恋愛意識との関係を検討している[7]が，恋愛と被服行動との関わりを検討した研究は全く見あたらない。そこで，本研究では，恋愛意識が被服行動に影響を及ぼすのではないかと考え，これらの関連について女子学生を対象として検討する。

2．方　法

2－1　測定項目

A．恋愛意識の測定

恋愛意識の測定は，前述の松井らが作成した測定尺度 (Lee's love type scale second version: LETS-2)[4] を用いた。まず「恋人や好きな人もしくは，家族以外で最も親しい異性」を一人思い浮かべさせ，その異性に対する気持ちや行動について40項目，回答者の恋愛に関する意見や異性観について13項目，計53項目を「よくあてはまる」「少しあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の 5 段階尺度で測定した。

B．被服行動の測定

被服行動は，流行性・機能性・適切性・経済性の 4 つの下位尺度ごとに 5 項目，計20項目（表 4 参照）からなる永野作成の被服行動尺度[8]を用い，恋愛意識と同様に，「全くあてはまらない」から「よくあてはまる」までの 5 段階尺度で測定した。

2－2　調査対象者と調査時期

調査対象は，本学および関西圏の大学，短期大学に在学する女子学生（年齢18～22歳）で，1994年11月に質問紙調査を実施した。有効回答者数は104名である。

2－3　分析方法

恋愛意識と被服行動との関連を次のようにして分析した。

まず，恋愛意識測定尺度項目に対して，対象者が回答した「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの 5 段階評定にそれぞれ順に 1 ～ 5 点を与えた。Lee の恋愛理論に基づいて，53項目を Mania, Eros, Agape, Storge, Pragma, Ludus の 6 つの下位尺度に類型化し，対象者別に 6 尺度それぞれについて反応得点を合計して，Storge については（41－合計得点）を尺度得点とし，他の 5 尺度については（46－合計得点）を尺度得点とした。そして，6 尺度ごとに尺度得点の多少によって対象者を高・中・低の 3 グループに分割した。

被服行動についても20項目に対する反応を得点化したが，この場合は，対象者が回答した「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの 5 段階評定に対して，それぞれ順に 5 ～ 1 点を与えた。そして，対象者別に 4 つの下位尺度ごとの合計得点を算出して尺度得点とし，その尺度得点にしたがって同様に対象者を 3 グループに分割した。また，「よくあてはまる」と「少しあてはまる」を「あてはまる」，「あまりあてはまらない」と「全くあてはまらない」を「あてはまらない」にまとめ，「どちらともいえない」と 3 つにカテゴリー化して，項目ごとに対象者を 3 グループに

分割した。

このようにして得た恋愛意識と被服行動のこれらのグループ間の関連の有無を χ^2検定によって分析し，相互の関連の強さを知るためにクラマーの関連係数を求めた。

さらに，対象者別に，恋愛意識の6下位尺度の中で得点の一番高い尺度をその人の恋愛タイプとし，恋愛タイプと被服行動尺度得点とのクロス集計をして χ^2検定を行った。

3. 結果および考察

3－1 親しい男性のプロフィール

調査の結果，対象者が思い浮かべた親しい男性の年齢を表2に示す。18～24歳が94%を占め，最高齢が32歳であった。図2に相手との関係を示す。恋人と答えた者が約半数である。

表2 相手の年齢

年齢(歳)	18	19	20	21	22	23	24	25	26	28	32
人数(%)	2	23	23	17	10	12	7	3	1	1	1

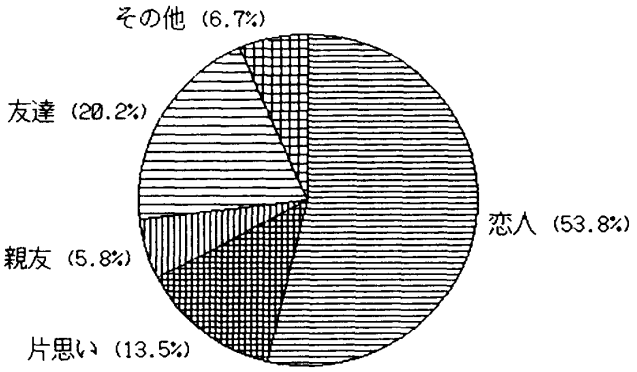

図2 相手との関係

3－2 恋愛意識と被服行動尺度項目との関係

恋愛意識を測定する53項目をMania, Eros, Agape, Storge, Pragma, Ludusの6つの下位尺度に類型化して，対象者別に6尺度それぞれについて尺度得点を算出した。その平均値と標準偏差を表3に示す。Mania尺度得点の平均値が一番高く，Maniaタイプが現代青年にとってもっとも主要な恋愛態度であるという橋本[9]や松井ら[4]の研究結果と一致している。6尺度ごとに尺度得点の度数分布に基づいて，対象者を意識の高いグループ（24.0～28.2%），中間のグループ（45.0～50.0%），低いグループ（24.0～28.0%）の3グループに分割した。

表3 恋愛意識尺度得点の平均値と標準偏差
(N＝104)

	平均値	標準偏差
Mania	18.84	8.48
Eros	17.38	6.61
Agape	14.06	6.72
Storge	16.89	6.42
Pragma	15.97	6.55
Ludus	16.67	5.27

6つの恋愛意識尺度得点の高・中・低3グループと被服行動尺度項目の「あてはまる」,「どちらともいえない」,「あてはまらない」の3グループとのクロス集計を行った結果を表4に示す。表には関連の強さを表すためにクラマーの関連係数を付記した。χ^2検定の結果，5%水準で有意な関連のある項目がStorgeを除く5類型で認められた。それらの項目の中から特に関連がみられた項目を図3～図8に示す。

流行性尺度項目では，「自分自身を人と区別して，より個性的に見せるために流行している服を着る」の項目でManiaおよびErosの2類型と関連が認められ，「いま，どのようなファッションがはやっているかについてよく知っている」の項目でManiaおよびPragmaと関連が認められた。図3にMania尺度得点と「自分自身を人と区別して，より個性的に見せるために流行している服を着る」の項目との関係を示す。この項目に，あてはまらない，すなわち，個性的に見せるために流行している服を着ないと答えた者が，尺度得点の低いグループは77.8%と多いのに対して，高いグループでは40.0%に減少し，1%水準で関連のあることが認められた。ErosについてもManiaと同様の結果が得られた。また，Maniaと「いま，どのようなファッションがはやっているかについてよく知っている」の項目との関係をみると，図4に示すように，あてはまると答えたのは，高いグループで43.3%いるのに対して，低いグループではその約半数にすぎず，5%水準で関連がみられ，Mania尺度得点が高いグループは流行に関心があることがうかがえる。この項目とPragmaとの関係をみると，尺度得点が高いグループと低いグループでは40%があてはまると答え，流行をよく知っている者が多いのに対して，中間グループでは15.7%と少なく，差異がみられた。

機能性尺度項目では，「吸湿性の良い生地の服を選ぶ」の項目でMania, Pragma, Ludusの3類型と関連が認められ，「保温性や通気性の良い服を選ぶ」の項目でStorge, Pragma以外の4類型と，そして「衣服のデザインよりはそれを着たときの動きやすさを重視する」の項目でPragmaおよびLudusの2類型と関連が認められた。図5にManiaと「保温性や通気性の良い服を選ぶ」の項目との関係を示す。Mania尺度得点の高いグループは，あてはまらないと答えた人の割合が他の2グループの3倍以上も高く，2.5%水準で関連が認められた。ErosとAgapeについてもManiaとほぼ同じ結果が得られ，これら3類型では

表 4　恋愛意識と被服行動尺度項目との関連

	被服行動尺度項目	Mania	Eros	Agape	Storge	Pragma	Ludus
流行性尺度	最新のファッションについて知るために多くの店を見てまわる						
	最新のファッションを着るようにいつもこころがけている						
	いまどのようなファッションがはやっているかについてよく知っている	* (0.21)				***(0.27)	
	ファッション雑誌をよく読む						
	自分自身を人と区別してより個性的に見せるために流行している服を着る	***(0.26)	** (0.24)				
機能性尺度	衣服のデザインよりはそれを着たときの動きやすさを重視する					** (0.24)	* (0.22)
	保温性や通気性の良い服を選ぶ	** (0.23)	* (0.22)	** (0.25)			***(0.28)
	華美さよりは機能性を重視して衣服を選ぶ						
	吸湿性の良い生地の服を選ぶ	** (0.24)				* (0.22)	* (0.23)
	丈夫で長持ちする服が良い						
適切性尺度	不謹慎だと人に思われる服装はしたくない						
	その場に合った服装というものは必要であると思う						
	その時の仕事の内容にふさわしい服装をするようにしている	* (0.22)	* (0.21)				
	人が「場違いな」服装をしているのをみることは耐え難い						
	自分の着ている衣服が社会的にみてふさわしいものであるかどうかをいつも考える						
経済性尺度	安い服であれば少しくらい気に入らなくても買うことがある						
	百貨店やブティックよりは，スーパーマーケットで服を買うことが多い						
	多少値段が高くても品質の良い衣服を選ぶ（逆転項目）					* (0.21)	* (0.21)
	自分にとって高価な衣服は必要ないと思う						
	どんなに気に入った服でも高ければ買わない		* (0.21)				

χ^2検定　***P＜0.01　**P＜0.025　*P＜0.05　（　）はクラマーの関連係数

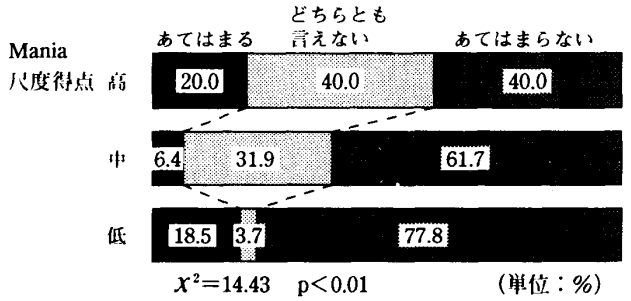

図 3　Mania と「自分自身を人と区別してより個性的に見せるために流行している服を着る」との関係

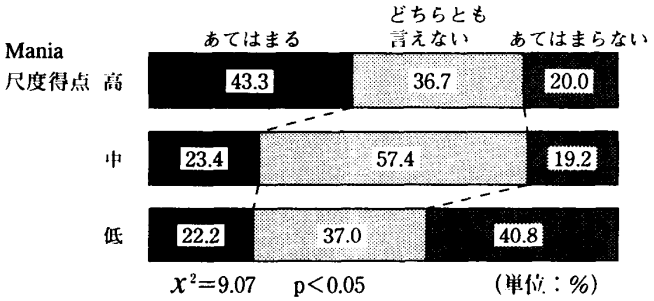

図 4　Mania と「いまどのようなファッションがはやっているかについてよく知っている」との関係

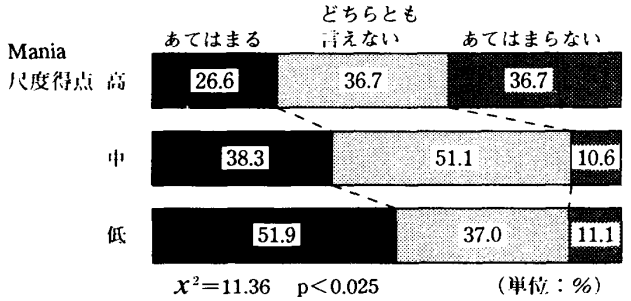

図 5　Mania と「保温性や通気性の良い服を選ぶ」との関係

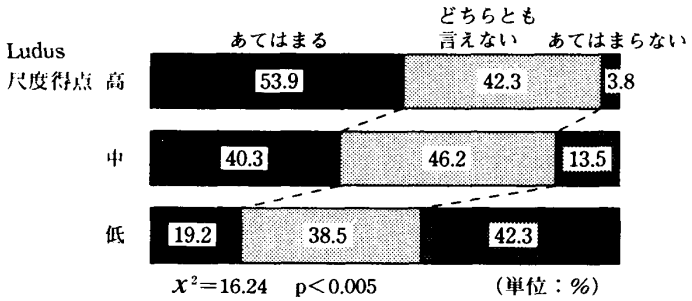

図 6　Ludus と「保温性や通気性の良い服を選ぶ」との関係

尺度得点が高いグループは機能性を軽視する傾向がみられた。Ludus については図 6 に示すように，前述の 3 類型とは逆で，「保温性や通気性の良い服を選ぶ」の項目に，尺度得点が高いグループはあてはまる，すなわち，機能性を重視すると答えた者が53.9%と多いのに対して，尺度得点が低いグループではあてはまらないと答えた者が多く，0.5%水準で関連が認められた。

Pragma と「衣服のデザインよりはそれを着たときの動きやすさを重視する」の項目との関係を図 7 に示す。Pragma 尺度得点が低いグループはあてはまらない，すなわちデザインを重視する人が68.0%と多いのに対して，尺度得点が高いグループでは動きやすさを重視する人の方が多く，2.5%水準で関連がみられた。Ludus についても Pragma と同様の結果が得られた。

適切性尺度項目では，「その時の仕事の内容にふさ

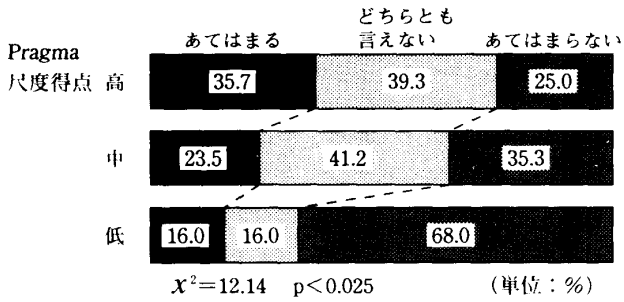

図7　Pragmaと「衣服のデザインよりはそれを着たときの動きやすさを重視する」との関係

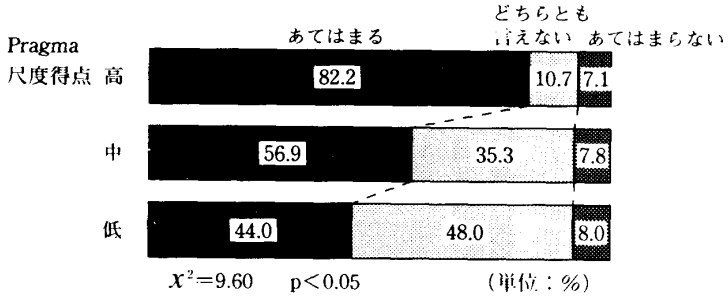

図8　Pragmaと「多少値段が高くても品質の良い衣服を選ぶ」との関係

わしい服装をするようにしている」の項目で，Maniaおよび Erosの2類型と有意な関連があるとの検定結果が得られたが，この項目の3カテゴリー間の度数分布に大きな偏りがあるため信頼性に欠けると解釈した。

経済性尺度項目については，「多少値段が高くても品質の良い衣服を選ぶ」の項目に Pragma および Ludusの2類型と関連が認められた。Pragma との関係を図8に示す。尺度得点が高いグループは，あてはまると答えた者の割合が82.2%と非常に大きく，堅実な被服行動をとっている者が多いのに対して，低いグループでは44.0%とその約半数である。Ludus の場合も同様の結果が得られ，いずれも5%水準で関連が認められた。

3－3　恋愛意識と被服行動尺度得点との関係

被服行動を測定する20項目への反応得点を各対象者別に流行性・機能性・適切性・経済性の4下位尺度ごとに合計して尺度得点を算出し，104名の平均値と標準偏差を表5に示す。適切性尺度は全体的に得点が高く，経済性尺度は得点が低い。対象者を尺度得点にしたがって，高いグループ（16.3～27.9%），中間のグループ（50.0～59.6%），低いグループ（21.2～28.8%）に分割した。

表5　被服行動尺度得点の平均値と標準偏差

(N＝104)

	平均値	標準偏差
流行性	14.56	3.26
機能性	16.16	3.02
経済性	11.97	3.01
適切性	19.22	2.25

6つの恋愛意識尺度得点の高・中・低3グループと被服行動尺度得点の高・中・低3グループとのクロス集計を行った結果を表6に示す。χ^2検定の結果，統計的に有意な関連が機能性尺度と流行性尺度に認められた。

流行性尺度得点と Mania 尺度得点の高・中・低3グループとの間の関係を図9に示す。5%水準で関連のあることが認められ，Mania 尺度得点の低いグループは流行性尺度得点の低い者の割合が他の2グループよりも大きいことがわかる。Eros についても，Mania とほぼ同様の結果が得られ，この2類型の尺度得点が低い者は流行性を軽視する傾向がみられる。

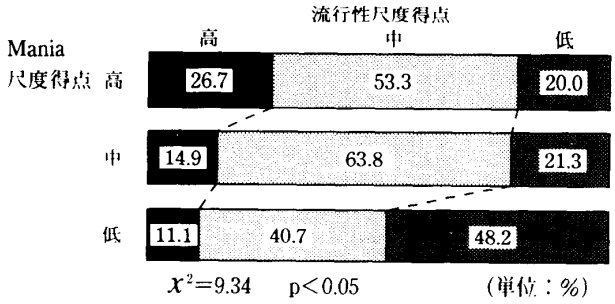

図9　Maniaと流行性尺度得点との関係

機能性尺度得点との関係をみると，図10に示すように，Mania 尺度得点の高・中・低の3グループとの間に2.5%水準で関連のあることが認められ，Mania 尺度得点の高いグループは被服の機能性を軽視している者が多いことが明らかである。Ludus については，図11に示すように Mania と逆の傾向を示し，Ludus

表6　恋愛意識と被服行動尺度得点との関連

	Mania	Eros	Agape	Storge	Pragma	Ludus
流行性尺度	* (0.21)	* (0.22)				
機能性尺度	** (0.23)				** (0.24)	*** (0.30)
適切性尺度						
経済性尺度						

χ^2検定　***P＜0.01　**P＜0.025　*P＜0.05　（　）はクラマーの関連係数

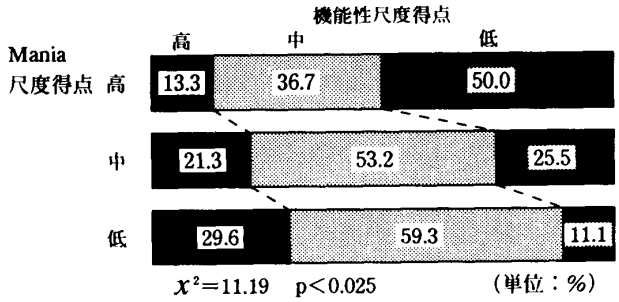

図10　Mania と機能性尺度得点との関係

尺度得点が高いグループは被服の機能性を重視する者が多く，0.1%水準で関連のあることが認められた。Pragma の場合も，Ludus と同様に，尺度得点の高いグループは機能性を重視する者が多いことがわかった。

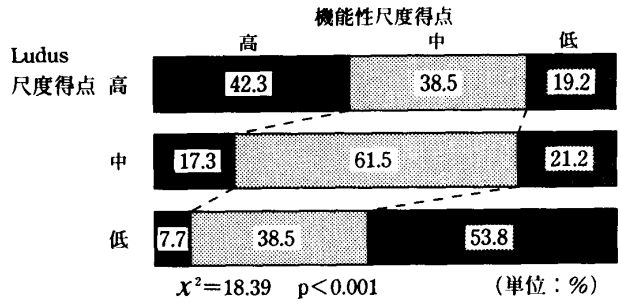

図11　Ludus 尺度得点と機能性尺度得点との関係

3－4　恋愛タイプと被服行動との関係

松井は6尺度の相関行列を多次元尺度構成法によって解析したところ，Mania, Eros, Agape の3尺度はまとまって布置され，他の3つの類型はそれぞれ独立していることから，日本の青年における恋愛関係の6類型は Lee が仮定したような円環構造ではなく，図12に示すような，Mania, Eros, Agape と Storge と Pragma と Ludus を頂点とする四角構造か三角錘構造をとるのではないかと推測している[7]。本調査の6尺度得点間の相関を表7に示す。Mania, Eros,

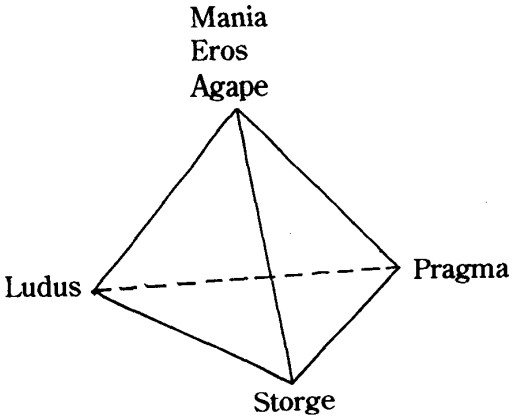

図12　日本青年を対象とした Lee の6類型の相互関係（松井，1993）

表7　恋愛意識6尺度得点間の相関係数 r

	Mania	Eros	Agape	Storge	Pragma
Eros	0.677**				
Agape	0.711**	0.646**			
Storge	0.302**	0.269*	0.327**		
Pragma	0.039	−0.029	−0.022	0.083	
Ludus	−0.196	−0.226	−0.187	0.030	0.418**

**P<0.001　*P<0.01

Agape の3尺度間は相関係数0.64以上（p<0.001）の高い相関を示し，本調査結果からもこの3類型は類似していると考えられる。そこで，尺度得点の一番高い類型をその人の恋愛タイプとして，対象者をこれらの4つの恋愛タイプに分けてみた。相手との関係と4つの恋愛タイプとのクロス集計結果を図13に示す。相

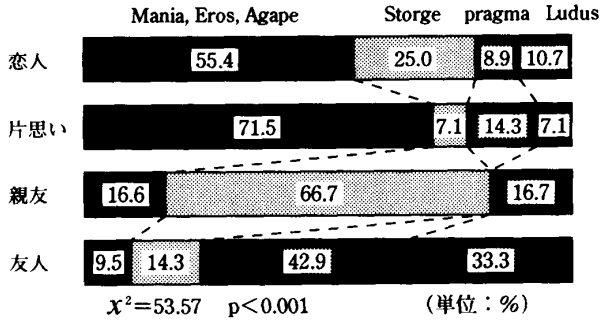

図13　相手との関係と恋愛タイプ

手との関係を恋人や片思いと認識しているグループには，Mania, Eros, Agape の3タイプの者が多い。この3類型が青年の恋愛における基本的な恋愛の型であると考えられ，女性の場合，恋愛関係を重視してロマンチックな行動をとり（Eros），相手のことを考えて激しい感情を抱き（Mania），相手のために尽くす意識（Agape）が恋愛の進展にともなって高まるとされている[7]こととよく整合している。穏やかな友情のような意識（Storge）は恋愛初期で高まり，進展につれて弱まるとされているが[7]，親友と認識しているグループに Storge タイプが多い。このことは，異性の親友という認識は友達から恋人へと進展していく途中段階ではないかと考えられる。友達と認識しているグループには Pragma と Ludus タイプの者が多い。恋愛をゲームと考え，楽しもうという意識（Ludus）は，ボーイフレンドとして友人に紹介する段階までは強まるが，それ以上の関係になると弱まるとされている[7]ことと整合している。

4つの恋愛タイプと被服行動との関係を検討した結果を図14に示す。機能性尺度との間に0.5%水準で関連のあることが認められ，Mania, Eros, Agape タイプは他の3タイプと比べて機能性尺度得点が低い者の割合が大きく，機能性を軽視した被服行動をとっているのに対して，Pragma と Ludus タイプは機能性尺

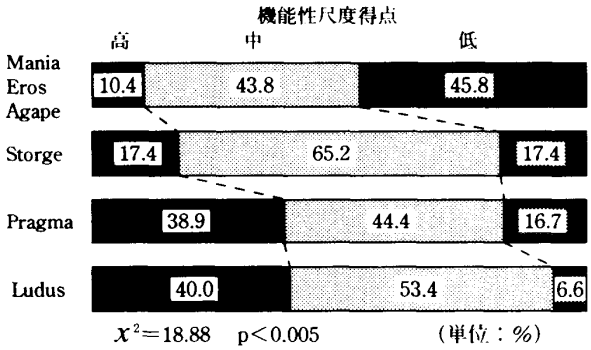

図14　恋愛タイプと機能性尺度得点との関係

度得点が高い者の割合が大きく，機能性を重視した被服行動をとっていることが明かである。これらのことから恋愛意識がその人の被服行動に関連していることが明かになった。

4. 結　言

Lee の恋愛類型論に対応する恋愛関係の意識を測定する尺度を用いて，恋愛意識と被服行動との関係を女子学生を対象として検討した。その結果，青年の恋愛において基本的な恋愛の型であると考えられている Mania および Eros 尺度得点が高い者，すなわち情熱的なタイプやロマンチックなタイプは，機能性軽視の被服行動をとっており，他のタイプと比較すると流行性を重視する者が多い傾向が認められる。また，特殊な恋愛の型であると考えられる Pragma（恋愛を地位の上昇などの手段と考えている実利的なタイプ）や Ludus（恋愛をゲームと考え，いずれの相手とも距離をとってつきあうタイプ）は，被服行動においても冷静かつ堅実で，被服の機能性を重視しており，恋愛意識がその人の被服行動に関連していることが明らかになった。

本研究では，恋愛と被服行動との関係を探る初めての試みとして，恋愛関係の全体像を把握するために，Lee の恋愛関係の類型論に基づいて作成された既存の尺度を用いて恋愛意識を測定したが，質問項目が多いので，本研究結果を踏まえて項目数を少なくした尺度を作成し，他方，被服行動の測定項目を増やして，恋愛と被服行動との関係を別の視点からさらに検討する予定である。

終わりに本研究を行うにあたり，データ収集と整理にご協力いただいた当時本学生活文化科 2 回生の林尚美，細野香織，宮井暁美，山下夏恵の諸嬢に感謝します。

5. 引用文献

1) 古畑和孝；心理学評論，33，257-272，心理学評論刊行会（1990）
2) Lee, J. A.; Psychology Today (October), 43-51 (1974)
3) Lee, J. A.; Personality and Social Psychology Bulletin, 3, 173-182 (1977)
4) 松井豊，木賊知美，立澤晴美，大久保宏美，大前晴美，岡村美樹，米田佳美；東京都立立川短期大学紀要，23，13-23（1990）
5) Hendrick, C., Hendrick, S., Foote, F. H., & Slapion-Foote, M. J.; Journal of Social and Personal Relationships, 1, 177-195 (1984)
6) Hendrick, C. & Hendrick, S.; Journal of Personality and Social Psychology, 50, 392-402 (1986)
7) 松井豊；心理学研究，54，335-342（1993）
8) 永野光朗；繊維製品消費科学会誌，35，468-473（1994）
9) 橋本順聖；仏教大学心理学研究所紀要，8，16-23（1992）